

適応指導教室における不登校中学生の 回復に関する研究（1）

—卒業生2名の面接調査によるレジリエンスの観点からの検討—

目白大学人間社会学部 日高 潤子
埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター 尾崎 啓子

【要約】

適応指導教室における不登校中学生の回復および成長に影響を及ぼす要因について、卒業生2名を対象とした半構造化面接により調査した。現高校生の卒業生男女各1名に対し、適応指導教室に通って役立ったこと、学んだこと等を質問し、レジリエンスの観点から検討を加えた。レジリエンスとは、困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態に導く特性のことである。ここでは、不登校経験からの回復と成長をレジリエンスの構成要因である「子どもの周囲から提供される要因」「子どもの個人要因」「子どもによって獲得される要因」の3点から検討した。

その結果、調査対象者2名の語りから抽出された役立った適応指導教室の援助機能は、生徒同士の親密な関係、相談員との信頼関係、補習機能であった。また、大人が子どもに真剣に向き合うことの影響は両者がともに強調しており、生徒の回復に関する重要な要因であると考えられた。レジリエンスの観点からは、両者に共通して適応指導教室から提供されていたのは、「安定した学校環境」「家族外での情緒的サポート」であった。一方、「子どもの個人要因」「子どもによって獲得される要因」の個人差により、生徒各人は適応指導教室が提供する援助機能をそのレジリエンス特性に応じて役立てていることが示唆された。

キーワード：適応指導教室、レジリエンス、不登校、中学生

I. 目的

文部科学省は不登校問題への取り組みとして、学校内の教育体制の充実、スクールカウンセラーなどの専門性の導入による教育相談体制整備に加え、学校外に「適応指導教室」を設置し、不登校児童生徒のための支援体制の充実を図ってきた。

適応指導教室とは、「不登校児童生徒等に対する指導を行うために教育委員会が、教育センター等学校以外の場所や学校の余裕教室等において、学校生活への復帰を支援するため、児童生徒の在籍校と連携をとりつつ、個別カウンセリング、集団での指導、教科指導等を組織的、計画的に行う組織として設置したもの」と定義されたもので（文部省初等中等教育局，1992），

平成15年度には1,096教室が設置されている（文部科学省，2004）。適応指導教室には「教育相談室のように単に相談を行うだけの施設は含まない」と明確に定義されており、多面的な支援を提供することにその骨子がある。

適応指導教室の機能について分類を試みた研究によると、たとえば河本（2002）は、指導員498名を対象とした質問紙調査により、適応指導教室の援助活動について「心理臨床的アプローチ」「学習サポート」「心身の育成」「集団活動」「外部との連携」「組織内の連携」の6つの因子を抽出した。また、中川ら（1997）は、適応指導教室に通室した中学校卒業生23名を対象としたイメージ調査により、公立適応指導教室の機能として「居場所としての機能」「人間

関係を学習する場所としての機能」「学習の遅れに対する補習を行う機能」「進路を決める上での援助機能」の4つを抽出した。下山(1999)は、相談員による相談活動の事例を検討し、相談員が行う対応のうち、「カウンセリングやグループ活動など対人関係へのアプローチ」「個別学習を中心とした学習面での援助」「生徒の在籍校との密な連携」を重要なものとして挙げている。

適応指導教室における実践についても、たとえば、定期的な個人心理療法と小集団活動とを組み合わせた援助(喜田, 2001; 小林, 2003)、小集団での定期的な調理活動の実践例(高月ら, 1996)、ソーシャルスキルトレーニングの活用と効果評価の試み(渡辺ら, 2003)などが報告され、それぞれ効果について考察が加えられている。

以上のように、これまでのところ適応指導教室の援助がどのように効果を上げうるかに関する考察は、ほとんどが特定の実践に関する評価である。しかし、適応指導教室における援助の効果について考えるとき、環境要因としての適応指導教室が提供する援助機能の観点からだけでなく、通級している児童生徒の個人要因や環境と個人、つまり適応指導教室と児童生徒との相互作用過程を包括して分析することが必要であろう。

適応や回復と関連があり、環境要因・個人要因・その両者の相互作用過程を含む概念として、レジリエンスがあげられる。これは、近年、諸外国の発達精神病理学の分野で盛んに研究されている概念で、定訳はないが「弾力性」と訳されることが多い。

その定義は、「困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態に導く特性」(Grotberg, 1999)、「ネガティブな心理状態に陥っても重篤な精神病理的な状態にはならない、あるいは回復できるという個人の心理面の弾力性」(石毛, 2003)、「かなりの悪条件のもとでも、肯定的な適応を可能にしていく動的な過程」(無藤ら, 2004)などがあるが、いまだ一致した概念定義はない。

小花和(2002)は先行研究をレビューし、レジリエンスの構成要因と特性を整理している。

それによると、環境要因として「レジリエンスの発達を促す環境要因 (I HAVE)」, 内的要因として「子どもの個人内要因 (I AM)」と「子どもの能力要因 (I CAN)」をあげ、それらが互いに関連しあっていることに注目している。

レジリエンス概念の構成要素も様々に見出されている。石毛(2005)は、自分の判断や行動を見直して自ら問題解決をしようとする自立的な傾向である「自己志向性」、物事をポジティブに考える傾向である「楽観性」、ネガティブな心理状態を立て直すために他者との関係を基盤にしようとする心性である「関係志向」の3因子をあげている。ネガティブライフイベントとレジリエンスの関連を調査した長内ら(2004)は、「状況分析能力」「心の強さ」「チャレンジ精神」「自己制御」の4因子を抽出している。American Psychological Association (2004)は、「家族などとのいたわりあい支えあう関係」「現実的な計画を立ててそれを一つ一つ実現していく能力」「自分自身へのポジティブな見方と自分の強さや能力への信頼」「コミュニケーションスキルや問題解決能力」「強い感情や衝動を統御する能力」を構成要素として挙げ、これらの要因は自分自身で発達させることができるものであるとしている。

ところで、筆者の一人は、高い学校復帰率を誇る公立のある適応指導教室と関わりを持っている。そこに通級し、学校復帰した児童生徒のうち、再度不登校状態を呈した者はほとんどいない。彼らの多くが進学や就職を果たし、安定した適応状態を示している。つまり、その適応指導教室に通級した生徒は、単に回復したという以上に、めざましい成長を見せているのである。

筆者らは、その高い学校復帰率、通級した児童生徒のめざましい成長が何によるものか探り、援助効果を上げるのに必要な普遍的要因を抽出したいという発想から、この適応指導教室を事例として取り上げて、検討を加えることとした。その際、前述したように環境要因、児童生徒の個人要因、環境と個人の相互作用過程を包括して捉えるために、レジリエンス概念を採用する。

本稿では、その研究の予備的な位置づけとし

て、中学時にその適応指導教室に通級していた現高校生2名を対象とし、彼らの回復・成長に影響を与えた要因について検討を加えることを目的とする。

II. 調査方法

調査対象：X 適応指導教室（以下、X 教室と略す）の卒業生2名（男女各1名）

調査方法：面接法

調査時期：平成18年8月

手続き：

半構造化面接：場所はX教室の教室を借りて、面接者（筆者）と面接対象者が1対1で個別インタビューを行い、1時間程度話を聞いた。インタビューに先立ち、面接者の簡単な自己紹介、調査の目的、結果の処理方法（匿名性が守られること）と論文などによる公表の可能性など倫理面に配慮した説明を行い、同意書にサインもらった。インタビューの進め方は、あらかじめ質問項目を準備したが、話の内容や流れによって面接のシナリオをある程度柔軟に変更する半構造化面接で行った。面接の質問項目は表1のとおりである。

分析：

面接の語りを通しての分析とレジリエンスの観点からの分析を筆者二人が一人ずつ分担して行った。

表1 調査協力者への質問事項

-
- ①通級時期と通うことになった時の気持ち
 - ②印象に残っていること
 - ③スタッフの先生たちや他の通級生徒たちとの関わり方
 - ④今振り返ってみて、通級前と後とで自分は変化したと感じるか、もし変化したならどのような変化だと思うか
 - ⑤変化に役立ったものは何か
 - ⑥X教室で学んだこと（学習という意味ではなく）あるいは得られたこと
 - ⑦X教室に対してもっとこうあってほしかったという希望の有無と内容
 - ⑧その他、面接者への質問など
-

III. 事例の概要

1. X教室について

関東地区の地方都市に在る公立の適応指導教室で、開設から5年を経ている。開設日時は学校に準じており、月曜日から金曜日の午前9時半から午後2時30分までとなっている。①人間関係作り、②学習活動と運動、③調理や手芸などの様々な体験活動、④生活習慣と社会性の育成、の4つを活動の柱とし、保護者や児童・生徒との相談活動にも力を入れている。

開設当初のスタッフは教育相談員A（退職校長・男性・60代）、指導員B（女性・40代）、指導員C（男性・20代）の3名で、いずれもX市の非常勤職員である。平成18年4月、A先生からD先生（男性・60代）へ、C先生からE先生（男性・20代）へ交代している。その他、X市内の9つの中学校に配置されている相談室の相談員も、週1～2回程度来室して活動の援助を行っている。さらに、平成16年10月から近隣の私立大学の学生が各学期に複数名、教職科目の授業の一環として午前中に通っており、通級児童・生徒とはほぼマンツーマンの学習支援をしている。筆者の1名は、平成16年6月に教室の活動を参観させてもらったことをきっかけにして、ほぼ1～2ヶ月に1回の割合で教室を訪れ、活動の参観、通級児童・生徒の在籍校の参観、指導員・相談員へのコンサルテーション、スーパービジョンを行っている。

2. 事例

以下の2事例は、面接対象者のプライバシー保護のため、差し障りのない範囲で内容を変更している。また本事例は、不登校状態からの回復における適応指導教室の役割・関与について検討することを主目的として取り上げたため、生育歴などの事例の詳細については聞き取りをしていない。

なお、内容は、前述したインタビューの質問項目8つに基づき、ある程度本人の言葉を使用して再構成している。

2事例ともに、通級していた頃のスタッフはA・B・C先生と中学校相談室の相談員のみであり、面接者との面識は無い。

ふたりとも、質問に対してよく考えて言葉を

選びながら丁寧に話してくれた印象があった。

(1) 事例1：F子（高校3年生・女子）
（インタビュー内容とX教室の当時の先生方の印象からまとめた来室経緯と経過）

短期間（3ヶ月）通級。もともと元気で友だちが多い生徒だった。家庭の事情で中2から1年間別の中学校に通っていたが、中3時に再び元の中学校に転入した。元の級友もいたため、F子は適応に不安を抱いていなかったが、思いのほか周囲とうまくいかず相談室登校となった。転入時に中1の時仲が良かった友だちが相談室登校をしていることを知り、なんとか教室に戻れるよう働きかけたが、そのことも他の友だちからいろいろときついことを言われる原因の1つとなったようである。F子には、友だちの不登校を支えようとした自分が何故不登校になってしまったのかという思いが強く、大人への反発心もあって、悩みが深まり、精神的に不安定になった時期もあった。

X教室では、A先生、B先生と長時間話すことが多かった。気持ちを言葉で表現できる生徒だった。他の中学校から通級している生徒との交流を通じて自分を見つめ、よく考えて学校に戻り、高校へ進学した。A先生は両親との相談にも時間をかけてサポートしていた。

高校進学後も折にふれてX教室を訪れ、進路の相談などを行っている。

現在は留学の夢を叶えるため、前向きに努力している。

①通級時期と通うことになった時の気持ち

中学3年生の12月から2月にかけて通級。A先生、B先生と偶然顔見知りであったため、何か不思議な気持ちで、どんな所かなと思って通級開始。X教室についての情報は、不登校で在籍中学校の相談室登校をしていた友だちから聞いていたが、ピンとこなかった。通級はいやではなかった。実際に来てみると、いろいろな学年の子がいて、思ったより明るかった。

②印象に残っていること

印象に残っていることは、体育館でみんなでバドミントンをしたことと、協力して教室掃除

をしたこと。みんなと一緒にしたことが印象深い。意外にみんな、まとまっていた。中学生同士で話す機会もあり、どうしてここに来ているのかとか悩みなどを話していた。

学校の問題、家庭の問題など、人によって抱えている問題が様々であることがわかった。ある女の子が、学校でひどいいじめにあっていて「学校には居場所が無い」と言っているのに、それでも学校に行こうとして「負けたくない」と登校を始めた様子を見ていて、すごいなと思った。

③スタッフの先生たちや他の通級生徒たちとの関わり方

先生方とはよく話し、いろいろと相談していた。親や学校の先生など大人への反抗心がいっぱいあったが、この先生方は明るく、話をしっかり聴いてくれ、コメントもくれたので、反発心はなく、気持ちが明るくなった。

他の子の姿に影響を受けた面は多い。みんなが学校に行っている時間帯にここに居ていいのかなとか、今頃学校では授業をやっているんだろうとか、学校といろいろ比べてみて、やっぱり学校に戻ろうかなと思った。

④今振り返ってみて、通級前と後とで自分は変化したとを感じるか、もし変化したならどのような変化だと思うか

変化はあった。学校に比べてX教室は刺激が少ないので、リラックスしてゆっくり考えられた。学校内の相談室にも行って見たが、同じ学校の中で、チャイムは鳴るし、外に出れば教室があるし、どうして自分は教室に入れないんだろうとか、今頃教室の状況はどうなっているんだろうとか考えてしまい、落ち着かなかった。X教室で学校から離れて気持ちが落ち着き、頭の中で考えを整理して学校に戻る決心ができた。他の人の悩みなども聞き、参考になることが多かった。

⑤変化に役立ったものは何か

変化に役立ったのは、時間があったこと。いろいろと考えることができた。学校であった出来事を思い返し、どうしてそういうことが起こ

ったのかと原因を考えたり、あのけんかはくだらなかつたなあと振り返ったりできた。再登校や進路などを決心するまでの時間は長かったが、自分には必要な時間だった。

⑥ X教室で学んだこと(学習という意味ではなく)あるいは得られたこと

学んだことは、不登校の実態。自分が不登校になる前は、何故不登校の生徒がいるんだらうという外側からの視点だった。不登校の友だちを相談室から教室に戻そうとして何回も誘ったり、どうして隠れながら登校するのかと思い、気持ちが理解できなかつた。X教室に来るようになって、不登校にはそれぞれ理由があつて、自分もそうだが、それをどうやって乗り越えるか、不登校状態から立ち直るにはどうしたらよいかを考えさせられた。気持ちが落ち着いてからは友人のことも考えられるようになった。残り少ない中学校生活を、どのようにすれば昔のように普通に過ごせるのかと思つてた。

⑦ X教室に対してもっとこうあつてほしかつたという希望の有無と内容

X教室への希望は、強いて言えば勉強時間ももっと多ければよかつたということ。学校に戻つた時に備えてここでも勉強しておかないと、戻つたら内容にも進捗にもついていけない。ここは先生も少なく、生徒に対して一度に全員の面倒は見られない。勉強しなきゃという意識がよほど強くないと、自分では勉強しない。また体験活動も多いため自由でよいが、自由だと居心地が良くなりすぎて学校に戻れなくなる。ただ、適応指導教室は学校とは違うので、どうしたらよいかは今でも謎。いろいろな子がいるから、勉強時間が増えると来なくなる子もいると思う。自分としては、勉強してわからなかつたところを理解してくると自信がついて良いと思う。

⑧ その他、面接者への質問など

現在は高校3年生で進路を考える時期だが、もう決めた。高校を卒業したら働いて資金を貯めて留学したい。語学とビジネスや観光に関する勉強をしてみたい。高校在学中に短期留学を

経験し、自分の力の足りなさや欠点がよくわかつたので、勉強していきたい。

(2) 事例2: G男(高校3年生・男子)

(インタビュー内容とX教室の当時の先生方の印象からまとめた来室経緯と経過)

長期間(1年半)通級。小学校時代は、運動能力が高く元気で、周りから信頼される子どもだったようだ。小6の秋に両親の別居に伴う転居をしたこと、そのことを学校の友だちには言えなかつたこと、中学校の入学式の直後風邪をひき数日休んだことをきっかけに周囲へのとけこめなさを感じてしまったこと、給食が苦手だったことなどが引き金となって不登校傾向となり、中2から不登校になって家に閉じこもり気味だった。悩んで死のうかと思つた時期もあつた。

X教室の先生方とはよく話したし、話も聴いた。同級生の友だちができ、元気になった。高校進学後も、時々教室を訪ね、勉強や生活、進路のことなど相談している。高校卒業後は就職を希望しており、現在就職活動で頑張っている。

① 通級時期と通うことになつた時の気持ち

中学2年生の2学期から卒業まで通級。時々相談室登校をしていた。X教室には、中学校で信頼していた先生から勧められて見学に来て、いい所だったので通うことにした。学校に行かない暮らしはいやだったし、周りの子たちも明るかつたし、先生もちゃんと話を聴いてくれる人たちで良かつた。

すぐになじめて、友だちもできた。他の中学校の同級生男子4人と仲良くなり、お互いの家を行き来して、毎日遊んだ。とても楽しかつた。今でも連絡を取り合っている。

② 印象に残っていること

体育館で先生や生徒たちと一緒にバトミントンをしたことが面白く、印象に残っている。バトミントンの面白さに目覚めて、高校の部活はバトミントン部に入った。

③ スタッフの先生たちや他の通級生徒たちとの関わり方

先生たちとはよく話した。今でも相談にのつ

てもらっている。信頼している。A先生はここで初めて会ったが、何でも話せるすごい人。朗らかだし、スポーツなど何でもできる。風格があり、オーラが違う。高校受験の時も、志望校見学に連れていってくれた。ここは本来は学校に戻るための所なので、人によってはA先生に戻るよう背中を押されている人もいたが、自分にはそれがなかった。基本的には自由で、いろいろとアドバイスをもらって選択肢を与えてくれた。無理に学校に戻そうとされなかったのがありがたかった。ちゃんと生徒ひとりひとりの個性や気持ちを大事にしてくれていた。結果的に高校にも進学できて感謝している。

ここでできた友だちとは、お互いに悩みを話した。学校に行っていないという共通の部分があるので、自分はどのようにして学校に行っていないのかとか、話しやすかった。気持ちが楽になった。ここに来てる子は基本的に真面目。真面目だからこそ学校にはなじめない。

④ 今振り返ってみて、通級前と後とで自分は変化したとを感じるか、もし変化したならどのような変化だと思うか

通級前と後での変化としては、大人と話せるようになったことが大きい。学校の先生とは話そうとも思わなかったが、ここに来て話すことが面白くなってきた。同世代とも話せるようになった。

ここがなかったら今の自分はない。明るくなれたし、性格がかなり変わった。普通の中学校に通うよりも精神的に成長したと思う。今、同世代の子のことを子どもっぽく感じることもある。

⑤ 変化に役立ったものは何か

変化に役立ったのは、大人が真剣に話を聴いてくれたことだと思う。安心できたし、パワーももらえた気がして不思議に感じる。沈んで死のうかと思っていた時期もあったのに、ひとつひとつ変わっていった。

⑥ X教室で学んだこと（学習という意味ではなく）あるいは得られたこと

X教室で得たことは社交性。人見知りだった

が初めて会った人とも話せるようになった。恥ずかしいという気持ちがあまらなくなり話すことが楽しくなった。学校のように大人数より少人数の方が合っている人もいると思う。学校で3年間話せなくてより、適応指導教室に来て話せるようになった方が良いと思う。

高校に入る時は、同じ中学から来た人に何か言われるんじゃないかと不安だったが、そういうこともなく周りに助けられた。運が良かったと思う。

⑦ X教室に対してもっとこうあってほしかったという希望の有無と内容

X教室への希望は、勉強をもっとやった方がよいということくらい。英語や理科、社会もやった方がよい。自分は国語と数学を頑張ったから、今でも成績はよい。でも英語はやらなかったので苦手のまま。周りに流されてしまった。もうちょっと勉強しておけばよかったと高校に入ってから思った。ただ、授業にすると学校に似てくるので、プリントとかをすればいいと思う。

⑧ その他、面接者への質問など

X教室のことをもっと早く知っていたら良かった。不登校になった頃から通っていたら学校にも行けていたかもしれないとも考える。でも、ここがあって良かった。なかったら今頃何をしていたかわからない。中学校の先が見えず、いろいろ考えてはいたが、ただ毎日を過ごしていただけた。高校に入ってから周りに合わそうとしてがむしゃらにやっていた。このことも思い出さなかった。落ち着いたら思い出した。

高校に通っていても、悩みがあるとここに来て相談する。何か節目がくるとここが関わっている。過去を大事にしながら来ているが、大人になったら来られないと思っているので、今年が最後かなと思う。社会人になって、立派にやっていますという姿を見せに来たいという気持ちがある。就職できればいいんだけど。

IV. 考 察

1. X 適応指導教室の機能

今回は事例数が少なく予備調査としての位置づけではあるが、適応指導教室を経て中学校を卒業し3年が経過したふたりの事例から考えられることを、先行研究に照らしながら検討する。

ふたりの語りにも共通していた要素として、適応指導教室には精神的な安定・回復をサポートする機能が見出せる。

F子もG男も通級期間の長短に関わらず、適応指導教室が複合的に担う4つの機能；①居場所機能、②人間関係学習機能、③補習機能、④進路相談援助機能（中川ら、1997）のすべてを活用し、結果的に精神的な落ち着きを得て、それぞれの道に進んでいった。これら4つの機能は、本来学校が持っているものとも考えられるが、教師や友だち、親との人間関係で傷ついた児童生徒が、学習面や進路などで悩んだ時に、学校や家庭などから起こってくる問題や葛藤から一時的に距離をとり、刺激が少ない環境で一定の安心感を得てから今後のことを考えるという時間と機会を与えられることは、悩みが深い通級児童・生徒たちにとって大きな援助となると思われる。一方、下山ら（1999）が指摘するように、この一時的猶予期間が内面的な課題からの回避に終わらないよう配慮する必要があるだろう。

人間関係学習機能について言えば、F子もG男も他の通級生徒との関わりから、悩みを共有できる仲間を得たり、悩んでいるのは自分だけではないことを知って自分の姿を客観視できる力をつけたりしたことが、不登校から次のステップへと踏み出す一助となっていた。同世代同士の交流の大切さは改めて論ずるまでもないが、F子とG男がともに教育相談員、指導員との会話やふれあいを通して心が安定し成長していったと、感謝をこめて語ったことの意味は吟味したい。彼らはインタビューの中で、大人への反発心や信頼できなさを感じていたが、大人が真剣に向き合ってくれて嬉しかったという主旨のことを話している。X教室の先生方は、筆者から見ても子どものために手間を惜しまず動く方々であり、学校と連絡をとったり、親子の

話を聴くためにひとりに対して1～2時間とったり、志望校見学に連れて行ったりと、親身な取り組みが周りに伝わってくる。特にA先生の卓越した個性と行動力、周囲に与える影響力はX教室の特性を際立たせており、こうした在籍校の先生や親とは一味違った大人との出会いが、彼らの精神的回復を支え、学校や社会への再適応を後押ししたことと考えられる。強烈な個性が人の回復に与える影響については今後の検討課題であるが、大人が子どもに真剣に向き合うことの重要性は示唆されよう。

大鐘（2005）の行った全国調査により、適応指導教室において不登校児童・生徒に援助を行っている職員の多くは教員であり、臨床心理士などの心理学を専門とする職員の配置はごくわずかであることが明らかになっている。従って、適応指導教室における相談活動は概ね教育的観点から行われる教育相談であり、情緒を取り扱う心理面接や心理発達アセスメントによる心理的援助とは異質のものと考えられる（大鐘、2005）。

いわゆる臨床心理面接では、1回の面接時間の長さや面接回数の頻度にある程度の上限があり、原則として面接室の外では行動を共にしないなどいくつかの行動の制限がある。一方、適応指導教室における相談・指導では、それらの制限が比較的ゆるやかである。そのため、必要に応じて面接の時間を延長する、回数を増やす、面接室外で行事や活動を共にしながら話をするなど援助活動で工夫をしやすいと言えるであろう。このことは、児童生徒に大人の真剣さを伝えやすい側面であると言ってよいだろう。

さらに、F子とG男が補習機能の重要性を挙げていたことにも注目したい。中川ら（1997）や下山ら（1999）は、学習に対する自信を得たことで学校復帰に弾みがついた例を紹介し、「適応指導教室の補習機能は、単なる学習補助だけでなく、生徒の自信や意欲を高め、課題に向かう動機づけを引き出す効果があることに意義がある」としている。生徒の状況にもよるとは思うが、学習面の指導を工夫することも有効な支援の手立てとなるだろう。

2. レジリエンスの観点から見たX教室の援助効果

以下に小花和(2002)によるレジリエンス構成要因の分類にしたがって、F子とG男の回復・成長の過程を考察する。太字部分は、レジリエンス要因に含まれる特性を示す。

(1) 事例1：F子

F子にとって「思ったより明るかった」という印象の「刺激が少ないので、リラックスしてゆっくり考えられた」X教室は、「子どもの周囲から提供される要因(I HAVE Factor)」の中の**安定した学校環境**と考えられる。また、「中学生同士で話す機会もあり、どうしてここに来ているのかと悩みなどを話していた」「この先生方は明るく、話をしっかり聴いてくれ、コメントもくれたので、反発心はなく、気持ちが明るくなった」などの発言から**家庭外での情緒的サポート**も得られていたことがうかがえる。

また、「子供の個人要因(I AM Factor)」として、「もともと元気で友だちが多い生徒だった」というF子の**好ましい気質**、いじめにあいながらも「負けたくない」と登校を始めた生徒を見て「すごいなと思った」**役割モデル**、「自分が不登校になる前は、何故不登校の生徒がいるんだろうという外側からの視点だった」「気持ちが理解できなかった」「気持ちが落ち着いてからは友人のことも考えられるようになった」などの発言から、以前は理解することができなかった不登校生徒の気持ちを、より共感的に理解できるようになり、友人のことを親身に考えられるようになったことがうかがえ、**共感性と愛他性**が発揮されたと考えられる。X教室でリラックスできたことにより、「いろいろと考えることができた」「頭の中で考えを整理して学校に戻る決心ができた」と話しており、提供された環境を生かして自ら考え、洞察し、回復していったのは、**自律性**があったためと思われる。

「子どもによって獲得される要因(I CAN Factor)」としては、変化に役立ったことは「いろいろと考えることができた」ことであり、「原因を考えたり」「振り返ったり」できた期間を「自分には必要な時間だった」と話している。これは、**問題解決能力**や**根気強さ**の獲得である

と言えよう。また、もともと大人に対して反発心を抱いていたF子がX教室の指導員らとの関わりによって「気持ちが明るくなった」ことは、**信頼関係の追求**ではないかと考えられる。

以上をまとめると、F子は提供された落ち着いた環境とゆっくり考えられる時間を、持ち前の**好ましい気質**や獲得された**問題解決能力**、**根気強さ**、**信頼関係の追求**によって最大限に生かし、自らの体験を整理して回復・成長していったのだといえる。また、友人関係を通して役割モデルや共感性と愛他性が発揮されており、その関係からF子も多くを得ていたと思われる。石毛(2005)が挙げる因子に従えば、F子は自分の判断や行動を見直して自ら問題解決をしようとする自立的な傾向である「自己志向性」を発揮したのだと言うこともできよう。

(2) 事例2：G男

「子どもの周囲から提供される要因(I HAVE Factor)」として挙げられるのは、「先生もちゃんと話を聴いてくれる人たち」であり、「生徒ひとりひとりの個性や気持ちを大事にしてくれていた」、「(変化に役立ったのは)大人が真剣に話を聞いてくれたこと」であり、それによって「安心できたし、パワーをもらえた」「沈んで死のうかと思った時期もあったのに、ひとつひとつ変わっていった」、また「ここでできた友だちとは、お互いの悩みを話した」ので「気持ちが楽になった」などの発言から、**家庭外での情緒的サポート**や**安定した学校環境**であったと言えよう。

また、「子どもの個人要因(I AM Factor)」としては、「周りから信頼される子どもだった」「すぐになじめて、友だちもできた」という**好ましい気質**、**他者にとっての魅力**が挙げられる。また、「何でも話せるすごい人」、「風格があり、オーラが違う」というA先生をはじめとする大人が自分の話を真剣に聴いてくれた体験は、彼の**セルフ・エスティーム**を高めた可能性がある。

「子どもによって獲得される要因(I CAN Factor)」としては、「(通級後)大人と話せるようになった」「X教室で得たことは社交性」「人見知りだったが初めて会った人とも話せるようになった」と語られたように、**コミュニケーション**

ヨン能力, ソーシャル・スキルが考えられる。また、「(通級中) 国語と数学を頑張ったから、今でも成績はよい」という発言から、**知的スキルの獲得**もなされていたと言える。

以上をまとめると、G男は**家庭外での情緒的サポート**と**安定した学校環境**を得て、持ち前の**好ましい気質**を發揮し、親密な友人関係の中で互いの悩みを話し合う体験をすることにより、**コミュニケーション能力, ソーシャル・スキル**を身につけるとともに、**信頼関係の追求**がなされていたと考えられる。これは、石毛(2005)が挙げた因子に従えば、ネガティブな心理状態を立て直すために他者との関係を基盤にしようとする心性である「**関係志向**」である。

以上見てきたように、端的に、F子は**安定した学校環境**を得て、自律性を發揮し、G男は**家庭外での情緒的サポート**を得て、**関係志向**を發揮したということもできる。

X教室が同じ援助機能を提供したとしても、その援助から何を受け取り、どう生かすかに関しては通級している児童生徒のレジリエンスが関わってくると言える。また、X教室も児童生徒の個性に応じて援助機能を選択・調整して提供していたはずであり、そのような環境(X教室)と個人(児童生徒)の相互作用過程を通して、児童生徒のレジリエンスは発達していくものと考えられる。

まとめと今後の課題

本調査は予備調査的な位置づけではあったが、X教室において不登校生徒中学生の回復に関与した要因をインタビュー調査により検討した。その結果、生徒の語りから抽出されたX教室の援助機能は、生徒同士の親密な関係、相談員との信頼関係、補習機能であり、大人が子どもに真剣に向き合うことの重要さも示唆された。また、レジリエンスの観点からは、X教室が提供した機能は「**安定した学校環境**」「**家庭外での情緒的サポート**」であること、X教室が意図的に提供した機能から何を役立てているかは生徒のレジリエンス特性によって異なることが見出された。

一方、今後の課題として以下の点があげられる。まず、本調査でのインタビュー事例数が2

名と少数であるため、今後は児童生徒の年齢、通級の時期、個人要因の違いなどを考慮して事例数を増やし、調査を重ねる必要がある。また今回の調査では、面接内容の分析を筆者一人づつの判断によって行ったなど、信頼性・妥当性が十分に検証されているとはいいがたい。今後、複数の分析者で協議する、面接協力者に再面接を実施し、調査者が行った分析の妥当性について確認する方法をとることが必要であろう。さらに、今回の調査は教室利用者である生徒の語りを対象としている。今後は、X教室側の要因を明らかにするために、指導員や相談員を対象とした調査を実施する必要がある。その中で、指導員や相談員の要因、X教室が意図して提供している援助機能、X教室が有する他の適応指導教室と異なる特徴について考察を加えることが必要である。それらの調査を踏まえ、X教室を一つの事例とした不登校児童生徒の回復に寄与する要因を明らかにしていくことが今後の課題である。

謝辞

本調査の実施にあたり、ご協力くださいましたX教室指導員ならびにインタビューに応じてくださった卒業生のF子さん、G男さんに心より感謝いたします。

引用文献

- Grotberg, E.H. : Tapping your inner strength. New Harbinger Publication. (1999).
- 石毛みどり (2003). 中学生におけるレジリエンスと無気力感の関連 人間文化論叢 6 243-252
- 石毛みどり 無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, 53. 356-367
- 河本 肇 2002 適応指導教室の目的と援助活動に関する指導員の意識 カウンセリング研究 35 (2) 97-104
- 喜田裕子 (2001). 適応指導教室を併用した定期的心理面接の意義—心理発達促進の観点から— カウンセリング研究 34 (2) 214-224

- 小林由美子 (2003). 不登校女子中学生に対する適応指導教室でのかかわり—アサーションモデルを提示して—心理臨床学研究 21 (3) 235-245
- 文部省初等中等教育局 (1992). 登校拒否問題への対応について (通知)
- 文部科学省初等中等教育局 (2004). 生徒指導上の諸問題の現状について (概要)
- 無藤 隆・森 敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治 2004 心理学 Pp.184-189
- 中川厚子・森井ひろみ・鶴田桜子 (1997). 適応指導教室の機能に関する研究—中学卒業生のフォローアップ— カウンセリング研究 30, 255-265
- 小花和 Wright 尚子 (2002). 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス 日本生理人類学界誌 7 (1) 25-32
- 大鐘啓伸 (2005). 適応指導教室に関する実態調査研究 心理的援助機能を考える 心理臨床学研究 22, 6, 596-604
- 長内 綾・古川真人 (2004). レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 7 28-38
- 下山寿子・須々木真紀子 (1999). 適応指導教室における相談活動—通級生徒 (中学生) の在籍校とのかかわりと特徴から— カウンセリング研究 32, 163-172
- 高月玲子・深山和子・井上真・奥田亮 (1996). 不登校対策における小集団活動の意味 (1) 心理臨床 9 (2) 107-114
- The American Psychological Association: The Road to Resilience. <http://helping.apa.org/resilience/2004>
- 渡辺弥生・山本弘一 (2003). 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果—中学校および適応指導教室での実践— カウンセリング研究 36 (3) 195-205

The factor of recovery from non-attendance at school with help in adjustment guidance class (1)

— examine resilience of two students after graduation by research interview —

Junko Hidaka Mejiro University, Faculty of Human and Social Sciences

Keiko Ozaki Faculty of Education Saitama University Integrated Center for
Clinical and Educational Practice

Mejiro journal of Psychology.2007 vol.3

Abstract

In this study, semi-structured interviews are held with two graduates of junior high school, who have experienced the non-attendance at school and recovered via adjustment guidance class (AGC), and their answers are analyzed from the viewpoint of resilience.

Resilience is the ability of people to overcome the difficulties and then thrive further.

They are asked what were useful help and acquisitions at AGC, and their recovery process is examined in the aspects of 'support from surrounding', 'personal issues' and 'acquisitions', that are the representative factors of resilience.

As a result, it is found that the effective function of AGC is the creation of intimacy relationship with peer, the placing reliance on teachers, and the supplementary lessons. Especially, they emphasized the effectiveness of serious facing of adults toward students.

They also suggest that both students were offered 'stable environment' and 'emotional support from outside the family' at AGC in common. There is difference among individuals in the aspects of personal issues and acquisitions, and it is supposed that they used the function of AGC according to their traits.

Key words : adjustment guidance class, resilience, non-attendance at school, junior high school students